

# 「聴くこと」の文化と教育（承前）

京 極 興 一

一 「聴くこと」はどのように意識されてきたか

「聴くこと」がどのように意識され、語られて来たか、その歴史的展望について、前稿（「学海」第十四号 平成十年三月）は中世から近代にわたる状況を取り上げたが、本稿では、時代を遡り、中国と日本の古代の資料について考察する。

## 1 耳 順

「聴くこと」を説いた歴史をたどる時、その筆頭に挙げべきは、次の孔子の言葉であろう。

子曰、吾十有五而志乎学、三十而立、四十而不惑、五

十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩  
〔論語〕卷第一 為政第二

子の曰わく、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順がう。七十にして心の欲する所に従って矩を踰えず。

（注） 以下、「論語」「莊子」から引用の原文・読み

下し文・現代語訳は、すべて金谷治訳注の岩波文庫本による。

これは、孔子が、自分の人生を回想し、その精神的成長の過程を語った言葉であるが、ここに見られる六十歳にして達した「耳順」の境地とはどのようなことを意味してい

るのだろうか。次に解釈例を挙げる。

天地万物の理に通達し、聞くに随って悉く理解が出来たことからいふ（『大漢和辞典』）

品性の修養が進み、聞くことが直ちに理解でき、なんらさしさわりも起こらない境地（『日本国語大辞典』）

道益々進み、人の言を聴くも耳に人るや直ちに了解して思慮を要せざるなり（『論語解義』簡野道明 明治書院）

何を聞いても皆すらすらと分かるようになったし、世間の毀譽褒貶にも心が動かなくなった（『論語』吉田賢抗 新釈漢文大系1 明治書院）

人のことばがすなおに聞かれる（『論語』金谷治 岩波書店）

右のように種々の説明が見られるが、これを要するに、「耳順」とは、人の言葉を聞くがままに理解し受け入れることができること、いわば「聴くこと」の究極の境地をさす言葉といえようか。常石茂氏は、次のように説く。

「道」そのものという普遍的存在に成った自己は、最早、「我」もなく、「道」もなく、誰が語る言葉である

うとも、それが「道」を語っているならば、或いは「道」がその口を通して語っているならば、聞えるがままに受け容れることができた。と、同時に、「道」に違ふような言葉を耳にしても、自己を侵されるといふような懸念も不安も覚えなくなった。「道」すなわち自己ほど確実な存在は他になくなっていたのである——孔子は、この頃そういう境地に達していたのだ（『論語を読む』勁草書房）

ただ、ここに注目すべきは、六十歳前後の孔子の活動と「耳順」への到達との関連についてである。孔子は五十六歳にして、長年仕官した魯国を去り、六十九歳まで諸国を遍歴した（七十四歳、魯国にて没）。「耳順」に到達した要因の中には、このいわば流浪の旅の時期の生活や人間関係の厳しい体験、更にそこから生れたより高い境地があったのではなからうか。単に人生の最終段階に近づいた心境の故ではあるまい。

次の言葉も、「聴くこと」のあるべき姿について説いたものである。

孔子曰、君子有九思、視思明、聴思聰、色思溫、貌思

恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義

〔論語〕卷第八 季氏第十六

孔子の曰わく、君子に九思あり。視るには明を思い、聴くには聰を思い、色には温を思い、貌には恭を思い、言には忠を思い、事には敬を思い、疑わしきには問いを思い、忿りには難を思い、得るを見ては義を思う。

この君子の九つの思うことに挙げられた「聴くには聰を思う」、即ち「聴くときにはこまかく聞きとりたいと思う」という言葉は、「聴くこと」についての目標と、心構えを説いたものである。「聴」（聰）は、「耳あきらか」の意、古来「聴」の目標を指す言葉である。

また、「莊子」の中に、孔子が「聴くこと」への思いを弟子顔回に説いた言葉が見られる。

夫徇耳目内通、而外於心知、鬼神将来舍、而況人乎

〔莊子〕人間世篇第四

夫れ耳目に徇いて内に通じ、而して心知を外にすれば、鬼神も將に來たり舍らんとす。而るを況んや人をや。

そもそも耳目の感覚が受けとったままを心に受け入れて、自分の心の分別を棄て去るなら、もろもろの神靈も集まってきてその心中に宿ることになるだろう。まして人々が慕い集まってくるのは、当然のことだ。

ここに用いられた「徇」は「順」に通じ、「したがう」を意味するから、「徇耳（目）」はまさに「耳順」と同義である。「耳に聞え目に映るままに、私心を去って心の内奥に受け入れる」ことは、その理想とすべき在り方を説く言葉と解される。

もとより「莊子」は莊周の作。次の例は、顔回が「心の齋戒とは何か」と問うたのに対する孔子の答えという形を取っているが、莊周としては、耳や心の世界を超越した実体の無い虚の世界「氣」によって、道、即ち物の道理を聴き取ることを説いているのである。「聴くこと」の奥深さの指摘は、注目すべきである。

若一汝志、无聴之以耳、而聴之以心、无聴之以心、而聴之以氣、耳止於聴、心止於符、氣也者虚而待物者也、唯道集虚、虚者心齋也（〔莊子〕人間世篇第四）

若、汝の志を一にせよ。之を聴くに耳を以てするこ

となくして、これを聴くに心を以てせよ。これを聴くに心を以てすることなくして、これを聴くに氣を以てせよ。耳は聴に止まり、心は符に止まるも、氣なる者は、虚きょにして物を待つ者なり。唯だ道は虚に集とまる。虚とは心齋なり。

お前はお前の心の働きを統一するがよい。耳で聞かないで心によつて聞くようにし、心で聞かないで氣によつて聞くようにせよ。耳は音を聞くだけであるし、心は外から来たものに合わせ「て認識す」るだけだが、氣というものは空虚でいてどんなものでも受け入れるものだ。そして真実の道はただこの空虚の状態にだけ定着する。この空虚な状態になることこそ心齋なのだ。

終りに、「無声に聴く」の一節を挙げておく。これは、「聴くこと」の奥深さを示すものとして、よく知られた言葉である。

視乎冥冥、聴乎无声、冥冥之中、独見曉焉、无声之中、独聞和焉、故深之又深、而能物焉、神之又神、而能精焉（「莊子」外篇 天地篇第十二）

冥冥めいめいに視み、無声むせいに聴く。冥冥の中に独りひと曉ぎょうを見、無声の中に独り和を聞く。故にこれを深くして又また深くし、而して能く物あり。これを神しんにして又神にし、而して能く精あり。

「この盛徳の人は、」微妙な暗さの中にものを見、音のない静けさの中にもものを聴く。つまり微妙な暗さの中で、ひとり光明を認め、音のない静けさの中で、ひとり調和を聞きとるのだ。だから、「その目と耳の働きを、」深いうえにもさらに深めて、「現象の奥の」物を把握することができ、靈妙なうえにもさらに靈妙にして、「根源的な」精氣を把握することができるのだ。

以上、「論語」「莊子」の中から、「耳順」ほか四点を挙げた。中国における「聴くこと」について説いた代表的な言葉、今日もなお生き生きとした説得力を感じさせられるものがある。

## 2 豊聰耳

「日本書記」は、聖徳太子について、次のように記している。

生而能言、有聖智。及壯、一聞十人訴、以勿失能辨。兼知未然。(中略)父天皇愛之、令居宮南上殿。故、

称其名、謂上宮廐戸豐聰耳太子(卷第二十二)

生れましなから能く言ふ。聖の智あり。壯に及びて  
ひとたびとたり。うたへ。あやま。おほみ。ひじり。さとり。をこそさかり

一に十人の訴を聞きたまひて、失ちたまはずして能  
く辨へたまふ。兼ねて未然を知らしめす。(中略)

父の天皇、愛みたまひて、宮の南の上殿に居ら  
しめたまふ。故、其の名を称へて、上宮廐戸豊  
聰耳太子と謂す(「日本書記」下 日本古典文学  
大系)

「豊聰耳」の「豊」は美称、「聰」の訓「と」は「する  
どい・すばやい・さとい」等を意味する。要するに、「聰  
くこと」において、非常に優れていたことを賛美した言葉  
である。

なお、この名については異同があり、

廐戸豐聰八耳命(「上宮聖德法王帝説」)

のほか、次に引用する「八耳ノ皇子」の説話がある。これ  
らに共通する語「八」は数の多いこと、従つて、「八耳」  
は「聴く」力の優れた様を賛美する言葉である。

太子二三ノ名在ス。一ハ廐戸ノ皇子、廐戸辺ニシテ  
生レ給ヘバト也。二ハ八耳ノ皇子、数人ノ一度ニ申  
ス事善ク聞テ、一言モ不漏裁リ給ヘレバ也。三八聖  
德太子、教ヲ弘メ人ヲ度シ給ヘレバ也(「今昔物語集」  
卷第十一第一 新日本古典文学大系)

いずれにしても、これらの説話は、当時の世の中におい  
て、「聴くこと」に対する高い評価と関心があつたことを  
思わせるものである。

ところで、「耳」なる漢字は、次の例のように、古く神  
の名に用いられている。

天忍穗耳命 須賀之八耳神 布帝耳神(「古事  
記」上卷)

神八井耳命 神沼河耳命 陶津耳命(同中卷)

そして、これらの「耳」の用法と意味について、本居宣  
長は、右に挙げた「天忍穗耳命」の説明の中で、次のよう  
に説く。

耳は尊称なり、(耳の字はもとより借字、)下に布帝耳  
神と云あり。又神武天皇の御子たちに、某耳と申す多  
く、其外の人の名にも多かる、皆同じことなり。

(中略) さて耳てふ尊称の意は、美は比に通ひて、かの産靈<sup>むすび</sup>などの靈<sup>ひ</sup>なるを、靈々と重ねたるものなり。

(中略) 右の名どもを考へ合せて、耳の靈々なることをさとりべし(「古事記伝」七之卷「本居宣長全集」

第九卷三二〇頁 筑摩書房)

この宣長の説の要点は、次の通りである。

1 「耳」は、身体の耳の意味を表わすものでなく、音「みみ」を表記するための当字である。

2 音「みみ」は音「ひひ」から転じたもの(「み」と「ひ」は通う音)である。

3 「ひ」は「靈」を意味する語である。

4 よって、「みみ」は「靈靈」を意味し、神の名の尊称として用いたものである。

これについては、「耳は稲魂の靈(祇)を現わす神名であろう」(上田正昭「国史大辞典」)とする説もあるが、「耳」が身体<sup>みみ</sup>の耳を表わすものでなく、尊称として用いられたことについては、ほぼ定説と見てよからう。

ただ、神の名の「耳」の字の使用は、後に、聖徳太子の「豊聡耳」「八耳」像の形成に、なんらかの影響を与えた

点がなかったであろうか。

なお、仏名にも「多聞<sup>たもんてん</sup>天」がある。「多聞」は仏語、仏の教えを多く聞き知っていること、「多聞天」は、常に仏が説法する道場の守護にあたり、法を聞くことが多いのでこの名があるという。

以上、古代中国と日本の文献の中から、「聴くこと」についての意識が見られるものを幾つか取り上げてきた。これらは、「聴くこと」を高く評価するとともに、その優れたあり方を求めてきた歴史の一齣といえようか。

## 二 「聴くこと」の近況

### 1 「広聴」の使用

「広聴」という語は、広く意見を聴くという意味で、古く用いられている。

君子博思而広聴(「新語」「大漢和辞典」所収例)

ただ、近代において、一般的な用語ではなかった。

ところが、最近、都道府県市町村等の公共団体の中で、住民からの意見、要望を聴取して行政運営に反映させることを重視し、その活動を「広聴」で表すことが多くなりつ

つある。

ただし、現段階においては、地域によって、「広聴」の使用の有無、使用の仕方かなりの差がある。例えば、新潟県庁は、平成二年に広報課を改め、広報広聴課とした。

長野県庁は、広報文書課の中に、広報係・広聴係・文書係等を置いている。「広聴」の名称を課と係のいずれに付けているかによって、それが直ちに活動の実態を示すとは思われない。しかし、両者を対比すると、新潟の例は、「広聴」重視の姿勢をより明確に示しているようにも感じられる。ただ、長野県の場合、時の人田中康夫知事は二月の県議会において、「広報・広聴機能の充実」と発言した。今後の「広聴」拡大の動きを示唆したのであろうか。

なお、両県庁を含め、中部・関東・東北圏の「広聴」使用の実態は、およそ次の通りである。

広報広聴課	新潟	岩手	茨城	愛知
広聴広報課	山梨	埼玉		
広報課	広聴係	長野	富山	
広報課	広聴担当	秋田		

国語辞典の「広聴」の扱いは、大・中辞典クラス（十数

万語以上）の場合、当初立項しなかったものも、一九九〇年ごろにはほとんどが立項した。これに対し、小辞典クラス（現代語中心、7万語前後）は、現在もほとんどが立項していない。使用増加の反映は不十分といえよう。

なお、「公聴」は、国会や行政機関が重要な事項の決定に際し、有識者等の意見を公開で聴取することを指すものであり、「広聴」と異なる。ただ、「広報公聴課」（岡山県）のように、課名に用いた例もある。

## 2 「聴くこと」の衰退

さて、「聴くこと」は、このような行政面での活況に対して、一般の生活面や教育面において、衰退を示す現象が相次いで報じられている。

例えば、成人式における祝辞の際に、私語を交わすなど勝手な行動をして聴こうとしないことが講師を怒らせ、式の中断等の混乱をきたす。これは毎年各地で見られることである。

二年前、飯田市で、立川談志は居眠りをしている客がいるとして落語を中断し、客は主催者に退席させられた。そ

の後、この客は聴く権利を侵害されたとして主催者側を訴えたが、違法性が認められないと認定され敗訴になるという事件があった。

教育面においては、授業中に私語・居眠り・退席等、聴く姿勢のない学習者が増加しているという問題がある、これは、以前には初等・中等教育の教室で多く見られたことであるが、最近では高等教育にも及び、私語対策を課題とする大学も多くなりつつある。

このような諸現象は従来あまり目立たなかった事柄であるが、言語生活の中の「聴くこと」の分野に大きな変動が生じていることを示唆するものといえよう。この変動の原因には何があるのであろうか。それを明らかにし、対策を立てることは、今日の重要な課題と考えられる。ただ、本稿においては、教育の問題について触れるに止める。

「聞くこと」の中でも、「聴くこと」は、明確な目的意識と意欲があつて成り立つもの、それは、受け身でなく、積極的な言語行動である。この観点からは、学習を目標とする場において、学習者に「聴くこと」の姿勢を強く求めることは当然であらう。しかし、一方において、「聴くこ

と」は、内容・表現ともに優れたレベルの「話すこと」を前提として成立するものである。即ち、学習者の学力・意欲等の実態把握に基づき、目標・内容・設計・技術等が適切に準備された授業が行われること、即ち教師の優れた力量が、「聴くこと」を喚起するのである。もとより、教育環境にも種々の問題がある。例えば、低学力者・目的意識希薄者が混在する多人数集団を対象とすることはその一例である。これに対し、制度や政策上の対応措置や、学校全体としての研究、努力があるにしても、個々の教員の活動にとつては厳しい状況といえよう。ただ、それを「聴くこと」が不振の理由にすることは、逃げ口上にならう。立川談志流は、教育の場にはふさわしくあるまい。

授業について、教員や学生にアンケート調査を行う大学が多くなり、その結果も公表されており、これは、実態把握の基本として評価される。その中のある大学の報告によると、学生が私語する原因はなぜかという教員に対する問（複数選択）について、回答の上位四項目は、次の通りであった。

学生の意欲 四五%

授業の内容 四三%



受講の動機 二九％ 教え方の技術 二〇％

学生の意欲や動機が不十分との指摘も多いが、教員の側の授業内容や技術面の研究が不足との反省も、それに匹敵する人数である。即ち、私語の問題は一方的に学生の責任とあるのでなく、教員と学生の双方にからむとの認識なのである。以前も、初等・中等教育に私語はあった。その時、教師は威厳をもって静かにさせるのが、一般的であったと思われる。しかし、その時の教師の心中にも、このような揺れがあったのではないだろうか。右のアンケート調査結果には、そのような教師の心情を垣間見ることができるようになる。学習者全体に、「聴くこと」の喜びを満喫させることがいかに難しいことか、しかしまた、教師の生きがいは、その一点にあるといえよう。「聴くこと」を目標にした「話すこと」は、いつの時代にも教育の根幹ということになるのか。

終りに、授業にならない授業に絶望しつつも、それを克服した一人の教師の体験談を挙げたい。

筆者大村はま先生は、戦後のいわゆる新教育の動きの中で中学の国語教師となり、優れた実践活動を通して、国語

教育界に大きな感銘と影響を与えた。次の言葉は、若い教師を対象に、教師の姿勢、授業のあり方について講演した一節である（「教えるということ」筑摩書房）。

こんなせりふがあります。子どもがよく聞いていないと、「よく聞いていなさい！」というのが。これも御法度にしたらいいのではないかと思います、専門職ならば。

（先生は、昭和二十二年の中学創設時に、戦災地の中学を希望し一年生百人の授業をしたが、その騒がしさにはなすすべなく途方にくれる。しかし、思い直して新聞や雑誌などいろいろのものから、百通りの教材をつくり、子どもに一つずつわたした）

すると、これはまたどうでしょう、教材をもらった子どもから、くいつくように勉強しはじめたのです、私はほんとうにおどろいてしまいました。そして、彼らはほんとうに「いかに伸びたかったか」ということ、「いかに何を求めていたか」ということ、私はそれに打たれ、感動したのです。（中略）

人間の尊さ、求める心の尊さを思い、それを生かすこ

とができないのは、全く教師の力の不足にすぎないのだ、ということがよくわかりました。

私はそれ以後いかなる場合にも、子どもたちに騒がれることがあっても、子どもを責める気持ちにはどうしてもなれなくなりました。

## 後 記

我々の言語生活は、「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」の四形態から成り立つが、これらは等質・等量の存在ではなく、また時代とともに変化するものでもある。このような言語生活史の認識に立って、「聴くこと」に対する意識と実態の変遷、その評価、未来像を明らかにしたいということが、前稿と本稿の主題である。

私が、教師生活の最終段階においてこのような問題に取り付いたのは、現在の教育現場と社会生活において、「聴くこと」が大きな問題点だという認識からである。また、戦後の国語教育が、「読むこと、書くこと、話すこと、聞くこと」の学習を目標としながらも、「聞くこと」だけはその埒外にあったこと、更に国語学の領域でも、この分野

が研究対象とされることがほとんどなかったこと、このような状況が、『『聴くこと』の文化と歴史』なる問題に私の意欲を誘ったのである。

それにしても、言語生活が国語学の研究対象であることを明確に説かれた恩師時枝誠記博士の教えが、今更のようによみがえる。また、本稿に文章を引用させていただいた常石茂（柳沢三郎）、大村はま、両先輩の御活躍の姿も懐かしい思い出である。ともに、学恩に感謝申し上げる。

終りに、本学を去るにあたり、国文科の発展と教員諸氏の御活躍を祈念申し上げます。

(二〇〇一・三・三一)